

どれくらい走っただろうか。

夢中で走って、ひとしきり痛みも吹っ飛んでいたが、少し落ち着くと、肢の痛さが前にも増して感じられた。

ふと気がつくと、肢を引きずって、やっとの思いであるいていた。

「ちっ…：今日はさんざんだったな…：」

前を歩いていたムク犬が、立ち止まって振り返った。

「おい、小僧…：大丈夫か？」

「おじさん…：あの…：」

その時、例の赤茶色の犬が、どこからか現れた。

「兄貴い…：へっへっへ…：」

尻尾を低くして、頭も下げて斜めに歩きながら、少し距離を置いて声をかけた。

痩せた短毛の犬だが、耳だけが中途半端に大きく、赤犬が歩く度に、その三角耳の先がはためくようにペコペコと折れ曲がって揺れる。また、尻尾もバランス悪く、やけに太くて長い。それをムク犬の前でブンブんと低めに振ってみせた。

「おいっ！ お前、よくも俺様の縄張りを荒らしてくれたな！」

「すまねえっす…：へっへっへ…：あにい…：あ、いや親分…：そうですぜ親分…：そうは言ったって…：へっへっへ…：」

「つべこべ言うなっ！ お前に親分って言われる筋合いはねえぞ！」  
ムク犬が牙をむき出すと、赤犬は横っ飛びに跳ねて身をかわし、

「へんっ！…：」

と、悪態をつきながら、耳をパタパタさせ、そのまま走り去った。

日が暮れかかっていた。

若犬は、自分の身に起こったいろんなことで、頭がいっぱいになっていた。

「 あのお、おじさん……」

「 その『おじさん』はやめる……」

「 おじ……さん……ゴン、て言うの……僕は、どうしたら家に帰れるの……」

それには答えず

「 歩けるか？……もう少し休んだら、飯にありつけそうな処を探そう」

と、ぼそつと言った。

夜が更けて、若犬はようやく少し元気が出てきた。

「 行くぞ……此処にいても食べるものは無いぞ」

ムク犬のゴンは、ゆっくりと歩き出した。若犬もそれに従った。

とある一軒の家にやってきた。

「 此処に入るの？」

「 静かにしろ……こっちだ」

二匹は、建物の裏に回った。

家の窓からは、暖かそうな灯りがもれている。どこからか、おいしそうな食べ物の匂いが漂ってきた。

……はあ……

若犬はため息をついた。

「 うちに帰りたい……」

彼は心底からそう思った。

ムク犬は、勝手口の網戸のついたドアの脇にある、蓋のついたバケツを見つけると、鼻で押し倒した。倒れた拍子にバケツの蓋が開き、中から食べ物の残菜がゴチャゴチャになって異臭と共に広がった。

「これ、食べるの？」

「いいから食べ……次はいつになるか、分からないぞ」

若犬は立ち尽くした。おなかは減ってはいたが……。

そして、家への懐かしさがこみ上げて、涙が出そうになった。

つづく